

修士論文

J-PARCにおける チャームバリオン分光実験用 リングイメージングチェレンコフ検出器の 粒子識別性能評価

大阪大学 大学院理学研究科 物理学専攻
徳田恵

2023年1月10日

概要

構成子クォークモデルでは記述できないハドロンの励起状態を記述するために、新しい有効自由度としてダイクォーク相関が考えられているが、ダイクォーク相関は実験的に確認できていない。クォーク間のカラースピン相互作用はクォークの質量に反比例するため、バリオン中の1つのクォークをu,dと比べて重いチャームクォークにすることで軽いu,d間のダイクォーク相関を観測することができると考えられている。したがって、チャームバリオンの励起状態を包括的に測定することで、ダイクォーク相関の存在を明らかにすることができると期待されている。

我々は、J-PARC 高運動量ビームラインにおいてチャームバリオン分光実験 (J-PARC E50 実験) を計画している。実験では、液体水素標的に $20 \text{ GeV}/c$ の π^- ビームを入射させ、 $\pi^- + p \rightarrow Y_c^{*+} + D^{*-}$ 反応によってチャームバリオンの励起状態 (Y_c^{*+}) を生成する。 D^{*-} の崩壊先である π^-, K^+ と π^- ビームの四元運動量を測定することでミッシングマス法により Y_c^{*+} の質量を測定する。 D^{*-} の崩壊粒子は $2\text{-}16 \text{ GeV}/c$ の広い運動量領域をもつ。この広い運動量領域で粒子識別を行うためにリングイメージングチェレンコフ (RICH) 検出器の開発を行なった。

RICH 検出器では、漏れ磁場の影響から光検出器として光電子増倍管 (PMT) ではなく MPPC を使用する。ただし、MPPC は受光面の面積が小さいため、チェレンコフ光を集光するためのコーン型ライトガイドを開発した。本研究では、東北大学電子光理学研究センター (ELPH) において検出面にコーン型ライトガイドと MPPC を使用したプロトタイプ RICH 検出器のテスト実験を行い、コーン型ライトガイドの性能評価を行なった。また、Geant4 によるシミュレーションを用いて実機における $\pi/K/p$ の粒子識別性能を評価した。

目次

第1章	序論	4
1.1	バリオンの構造	4
1.1.1	チャーム・バリオンにおけるダイクォーク相関	4
1.2	チャームバリオン分光実験 (J-PARC E50 実験)	5
1.3	高運動量ビームライン	5
1.4	チャームバリオン・スペクトロメータ	6
1.5	本研究の目的	6
第2章	リングイメージング・チェレンコフ検出器	8
2.1	チェレンコフ放射	8
2.2	リングイメージング・チェレンコフ検出器	9
2.2.1	輻射体	9
2.2.2	球面鏡	9
2.2.3	光検出器	9
2.2.4	先行研究による要求性能	9
第3章	プロトタイプ検出器の性能評価試験	10
3.1	プロトタイプ検出器のデザイン	10
3.1.1		10
3.1.2	コーン型ライトガイドの深さ最適化	10
3.1.3	検出面の配置	11
第4章	GEANT4シミュレーションによる実機の粒子識別性能評価	12

図 目 次

1.1	チャームバリオン生成反応の模式図。終状態の (K^+, π^-, π^-) と入射ビームの四元運動量を測定することで、チャームバリオンの欠損質スペクトルを得る。	5
1.2	チャームバリオン・スペクトロメータの概要図。ビーム粒子測定用検出器群と標的と反応して生成された散乱粒子を測定する磁気スペクトロメータで構成される。	7
2.1	チェレンコフ放射の模式図	8
3.1	コーン型ライトガイドの模式図。入口直径が 50 mm の場合と 30 mm の場合。	10

表 目 次

第1章 序論

1.1 バリオンの構造

ハドロンはクォークとグルーオンで構成される、強い相互作用をする複合粒子であり、3つのクォークから構成されるバリオンと1つのクォークと1つの反クォークから構成されるメソンに分類される。構成子クォークモデルは、これまでに観測されている数多くのバリオンの性質を説明することができるが、一部の励起状態やエキゾチックハドロンと呼ばれる状態を説明することは困難である。近年、これらの状態を2つのクォーク間の相関であるダイクォーク相関を導入することで説明する試みがなされている [1]。しかしダイクォーク相関の存在は未だ実験的に確認できていない。

1.1.1 チャーム・バリオンにおけるダイクォーク相関

ダイクォーク相関とは2つのクォーク間の相関であり、3つのクォークで構成されるバリオンでは3対のダイクォーク相関が存在する。アップクォークやダウングォークのみからなる軽いバリオンでは、この3対のダイクォーク相関は縮退しており1対のみを分離することは困難である。しかし、軽いクォークの1つを重いクォークに置き換えることで1対のダイクォーク相関を運動学的に分離することが可能となる。チャームバリオンは、アップクォーク、ダウングォーク、ストレンジネスクォークらと比べて5倍ほどの有効質量を持つチャームクォークを持つバリオンであるため、ダイクォーク相関が顕在化すると考えられている。図??に示すように、チャームバリオンではダイクォーク相関とチャームクォークの相対運動状態である λ モードと、ダイクォーク相関の内部励起状態である ρ モードに運動学的に分離し、アイソトープシフトと呼ばれる2つの励起モードが準位構造に現れる。この2つの励起状態のエネルギー比は、

$$\frac{\hbar\omega_\rho}{\hbar\omega_\lambda} = \sqrt{\frac{3m_Q}{2m_q + m_Q}} \quad (1.1)$$

となる。ここで m_Q と m_q はそれぞれ重いクォークと軽いクォークの構成子クォーク質量である。重いクォークを含まず、3つのクォークが全て軽いクォークの場合は $m_Q = m_q$ であり(1.1)式より励起状態のエネルギー比は1となる。つまり λ モードと ρ モードは縮退していることがわかる。一方で、1つの重いクォークの質量 m_Q が他のクォークの質量 m_q に比べ十分に大きい場合、(1.1)式は

$$\frac{\hbar\omega_\rho}{\hbar\omega_\lambda} \longrightarrow \sqrt{3} \quad (1.2)$$

となる。また、クォーク間のカラーสปิน相互作用はクォークの質量に反比例するため、軽いクォーク同士の相関は軽いクォークと重いクォークとの相関よりも強くなる。した

がって、チャームバリオンの励起エネルギーや生成率、崩壊率を詳細に測定することで、ダイクォーク相関を明らかにすることができると期待されている。

1.2 チャームバリオン分光実験 (J-PARC E50 実験)

我々は、大強度陽子加速器施設 (J-PARC) のハドロン実験施設内にある高運動量ビームラインにおいてチャームバリオン分光実験 (J-PARC E50 実験) を計画している。図 1.2 にチャームバリオン分光実験におけるチャームバリオン生成反応の模式図を示す。実験では、20 GeV/c の高運動量 2 次粒子 π^- ビームを液体水素標的に照射し、生成されたチャームバリオンの励起状態を観測する。チャームバリオン (Y_c^{*+}) は式 (1.3) に示す反応によって生成する。この時生成される D^{*-} は式 (1.4) に示す崩壊モードにより、2 つの π^- と 1 つの K に崩壊する。これらの崩壊粒子と入射 π^- ビームの四元運動量を測定することで、質量欠損法によりチャームバリオンの質量スペクトルを得る。

$$\pi^- + p \rightarrow Y_c^{*+} + D^{*-} \quad (1.3)$$

$$D^{*-} \rightarrow \pi^- + \bar{D}^0 \rightarrow \pi^- + \pi^- + K^+ \quad (1.4)$$

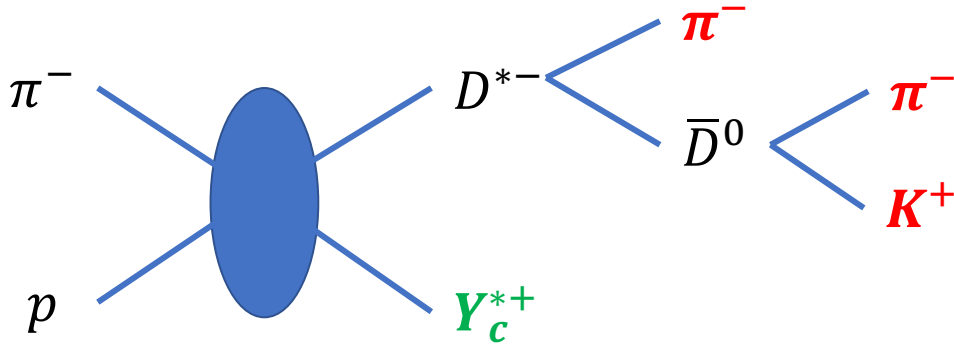


図 1.1: チャームバリオン生成反応の模式図。終状態の (K^+ , π^- , π^-) と入射ビームの四元運動量を測定することで、チャームバリオンの欠損質スペクトルを得る。

1.3 高運動量ビームライン

チャームバリオン分光実験は、J-PARC ハドロン実験施設に新たに建設された高運動量ビームラインで行われる。このビームラインは、既存の一次陽子ビームラインを電磁石で

分岐させ、分岐点に二次粒子生成標的を置くことで 20 GeV/c までの高運動量二次粒子を供給できる。実験では、20 GeV/c の π^- ビームを用いる予定である。

1.4 チャームバリオン・スペクトロメータ

図 1.4 に、チャームバリオン・スペクトロメータの概要図を示す。生成標的は 4 g/cm^2 の液体水素 (LH^2) を用い、アクセプタンスが最大となるよう、スペクトロメータ磁石付近に設置する。ミッシングマス法を用いる場合、ビーム粒子と散乱粒子を測定する必要がある。そのため、チャームバリオン・スペクトロメータはビーム粒子測定用の検出器群と散乱粒子測定用の検出器群で構成されている。ビーム粒子測定用の検出器群は、ビーム粒子を識別するためのリングイメージング・チェレンコフ検出器、ビーム粒子のタイミングを測定するためのビームタイミング検出器、ビーム粒子の位置と角度を測定するためのシンチレーションファイバー検出器で構成される。高運動量ビームを用いた固定標的実験の場合、散乱粒子 (D^{*-}) からの崩壊粒子だけでなく、生成された Y_c^{*+} からの崩壊粒子も前方へ放出される。前方への崩壊粒子を効率よく測定するため、散乱粒子測定には双極磁石システムを用いる。ビーム粒子 (π^-) の運動量が 20 GeV/c の場合、 D^{*-} の崩壊粒子である \bar{D}^0 から崩壊した K^+ と π^- は $2 - 16\text{ GeV/c}$ の運動量分布を持つ。これらは、標的下流のシンチレーションファイバー検出器、ドリフト・チェンバー、閾値型チェレンコフ検出器、リングイメージング・チェレンコフ検出器によって測定する。また、 D^{*+} からの遅い π^- と Y_c^{*+} からの崩壊粒子を広いアクセプタンスで測定するために、磁石内部にもタイミングカウンターと飛跡検出器を設置する。

1.5 本研究の目的

本研究の目的は、先行研究 [4] で設計された散乱粒子識別に用いるリングイメージング・チェレンコフ検出器の粒子識別性能を評価することである。目標性能としては、誤識別率 3% を未満に抑えるため、角度分解能は 9.62 mrad が要求される。本論文の内容は以下の通りである。2 章では、リングイメージング・チェレンコフ検出器について述べる。3 章では、制作したプロトタイプ検出機の性能評価試験について述べる。また、Geant4 を用いたシミュレーションにより試験結果の再現を行なった。4 章では、3 章での再現結果を用いたシミュレーションにより、実機での性能評価を行なった。

チャーム・バリオン・スペクトロメータ

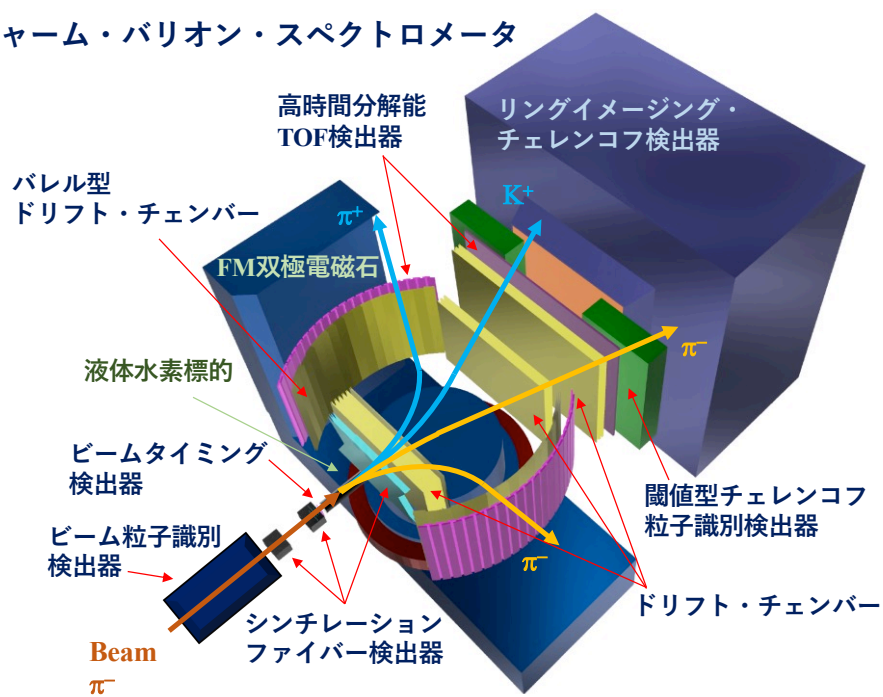


図 1.2: チャームバリオン・スペクトロメータの概要図。ビーム粒子測定用検出器群と標的と反応して生成された散乱粒子を測定する磁気スペクトロメータで構成される。

第2章 リングイメージング・チェレンコフ検出器

2.1 チェレンコフ放射

チェレンコフ放射とは、荷電粒子が物質を通過する際に荷電粒子の速度がその物質中の光速を超えると光を発生することである。またその際の光をチェレンコフ光という。速度 β の荷電粒子が屈折率 n の物質中を通過する際に、チェレンコフ放射が発生する条件は (2.1) 式で表せる。

$$\beta \geq \frac{1}{n} \quad (2.1)$$

チェレンコフ光は図 2.1 のように円錐状に発生し、その際のチェレンコフ角 θ_c は (2.2) 式のように表せる。

$$\cos \theta_c = \frac{1}{n\beta} \quad (2.2)$$

また、単位長さの輻射体から発生するチェレンコフ光の光子数 dN/dx は (2.3) 式のように表される。

$$\frac{dN}{dx} = 2\pi z^2 \alpha \int \left(1 - \frac{1}{\beta^2 n^2}\right) \frac{d\lambda}{\lambda^2} \quad (2.3)$$

ここで、 z は荷電粒子の電荷数、 α は微細構造定数、 λ はチェレンコフ光の波長である。

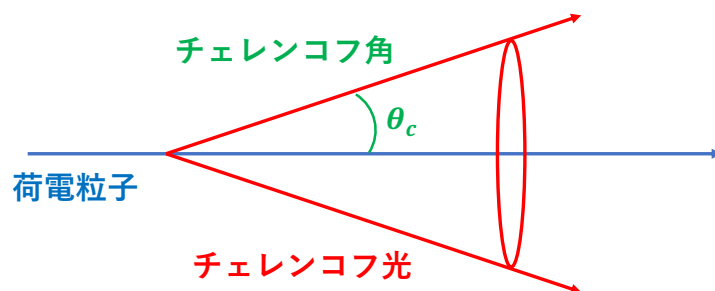


図 2.1: チェレンコフ放射の模式図。

2.2 リングイメージング・チェレンコフ検出器

(2.1) 式から、荷電粒子の質量 m と輻射体の屈折率 n が既知の場合、チェレンコフ放射が発生する荷電粒子の運動量の閾値 p_t は (2.4) 式のように表される。

$$p_t = \frac{m}{\sqrt{n^2 - 1}} \quad (2.4)$$

したがって、荷電粒子の運動量が既知の場合、適切な屈折率の輻射体を用いることで荷電粒子の種類が特定できる。このように、チェレンコフ放射の有無で粒子識別を行うものを閾値型チェレンコフ検出器という。これに対し、チェレンコフ光を検出し、チェレンコフ角を測定することにより (2.2) 式から粒子の速度を求め、粒子識別を行うものをリングイメージング・チェレンコフ検出器という。今回は、リングイメージング型のチェレンコフ検出器についての研究を行った。

2.2.1 輻射体

チャームバリオン分光実験では、リングイメージング・チェレンコフ検出器で $2-16\text{GeV}/c$ の運動量領域での $\pi/K/p$ の粒子識別が必要となる。

2.2.2 球面鏡

2.2.3 光検出器

2.2.4 先行研究による要求性能

第3章 プロトタイプ検出器の性能評価試験

3.1 プロトタイプ検出器のデザイン

3.1.1

3.1.2 コーン型ライトガイドの深さ最適化

今回のテスト実験では、セグメントサイズの違いによる分解能への影響を理解するために図 3.1 の様な 2 種類のコーン型ライトガイドを製作した。

先行研究からセグメントサイズは 50 mm 以下が要求されているので、入口直径は 50 mm とより小さい 30 mm とした。MPPC を取り付けるため、出口直径はどちらも MPPC の対角線の長さとなる 8.5 mm とした。ここで、各コーンの深さによって集光効率が変わるため、最適な深さを GEANT4 によるシミュレーションを用いて決定した。まず、図の様にコーン入口に対して垂直に光子を入射させ、コーンの深さを変えながら式で定義される収率をもとに最適な深さを決定した。図から、50 mm コーンは 110 mm, 30 mm コーンは 31 mm 以上の深さが良いことが分かった。今回は、設計に余裕を持たせるため 50 mm コーンは深さ 120 mm, 30 mm コーンは深さ 33 mm のものを製作した。

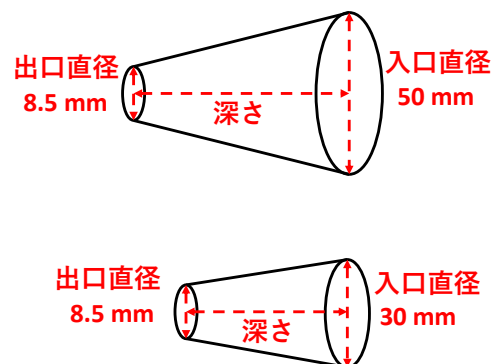


図 3.1: コーン型ライトガイドの模式図。入口直径が 50 mm の場合と 30 mm の場合。

3.1.3 検出面の配置

第4章 GEANT4シミュレーションによる 実機の粒子識別性能評価

参考文献

- [1] M. Anselmino *et al.*, Rev. Mod. Phys. 65, 1199 (1993).
- [2] K. Shirotori *et al.*, "Charmed Baryon Spectroscopy Experiment at J-PARC", JPS Conf.Proc. 8 022012 (2015)
- [3] H. Noumi *et al.*, J-PARC P50 proposal,
<http://www.j-parc.jp/researcher/Hadron/en/pac1301/pdf/P502012-19.pdf>
- [4] 山我拓巳, "チャームバリオン分光実験用粒子識別検出器の設計", 2013 年度大阪大学理学研究科修士論文.
- [5] 赤石貴也, "チャームバリオン分光実験用ビームタイミング検出器の開発", 2018 年度大阪大学理学研究科修士論文.
- [6] 辰巳凌平, "低屈折率エアロゲルを用いた閾値型のエアロゲル・チェレンコフ粒子識別検出器の性能評価", 2022 年度大阪大学理学研究科修士論文.